自主規制――改革案と対決し

プロ学同島根大支部の中間総括

大学制度を告発せよ

激烈に闘い続く全国学園闘争の目覚的一翼を担い、無期限バリケードストを堅持している島大の闘いは、いま政府権力による大学・立法の策動の前に、緊急にいままでの活動の総括的検討と戦列を打ち固めることを要請されている。入試闘争で十七名、四・二八で七名の学友が、不当にも検挙され、主体的条件の困難ななかで、五・七東大全共闘八最首悟氏らV連帯集会からASPAC闘争まで連続的に闘いを準備していかなければならない。このような実践のうち続くなかで、われわれは、理論構築の作業を進めてきた。革命的理論なくして、革命的行動はないということを、われわれの中間的総括とした。

われわれは、わが学園闘争の総括的検討を加えるに当って、次のことを確認しておかなければならない。

つまり島大学園闘争の特殊性と全国性――その矛盾がいかなる形態において止揚されたのか、あるいは止揚されつつあるのかということである。

こうした、わが学園闘争の内在的な運動の論理が、いかなる地点で、今日の全国学園闘争の質と切り結ぶのか、ということの解明なくしては、総括を語り得ないことである。

島大闘争第一期

2・4の事態と連続的大衆団交

2月4日から、2月8日に至る連続的大衆団交の爆発的高揚は主に次の二要因に規定されていた。

第一に警官――機動隊学内侵入に対する即自的反抗意識、一言で言うならば、学友の即自的反警察意識によって支えられていた。第二には、2・4沖縄ゼネスト連帯闘争の準備過程における、大衆的な政治討議による学友の政治経験である。こうした要因に規定され、支えられながら初期島大闘争は出発したが、この段階の特徴は、反警察抗議闘争としての性格と「大学自治」に無感覚な教授会に対する不信感、つまり、心情レベルでの大学批判をその特徴としていた。

そうであるが故に、大衆団交における第一項目の討議・追求は「今後一切の警察権力の介入を許さない」ということが「学問の自由・思想・信条の自由を犯さない」と限定される傾向性を持っていた。残念ながら、われわれは、「学問の自由」＝「大学の自治」という幻想性を打ち破り得なかったのである。つまり、そこにこそ不徹底な大学批判が存在していたということなのだ。

従って、2月8日鑑識車引き渡し事件において、われわれ阻止派は、民青―本山教官の〈機動隊導入―大学の自治の侵害〉という幻想的「大学自治」論に、政治的・軍事的敗北をせざるを得なかったのである。初期島大闘争の二極分解―反警察抗議闘争と不徹底な大学批判は9月10日の千五百名の県警抗議デモをピークに、反警察抗議闘争的性格は一応終り、本格的な「大学批判」に向かう。

ここで明らかにしておくことは2・8まで大学当局は連続的大衆団交をはじめは一方的に拒否しつづけたということである。このことの意味は重大である。

大学当局は「社会的責任」において「鑑識車が学内にあるという不正常な事態」を一刻も早く「克服」するために「必死」の努力を続けたということ、そのためには「対策委員会」なるものを設置し「努力」したため、その後、大衆団交に連続的に応じたということである。従って彼らは、その「社会的責任」を果すや否や、学生に対する責任は一切拒否するに至ったのである。そのような教授会の姿をわれわれは決して忘れてはならないのである。

2・22―24大衆団交が明らかにしたこと

大学当局の団交一方的拒否後、二週間ぶりに開かれた2・22―24大衆団交は「キーとエアー」の問題に関しての大衆団交などではなかった。

そこにおいて告発したものは、第一に、国家に意志を組織された「管理機構としての教授会」そのものの姿である。2・22六衆団交の論議―追求が明らかにしたことは次の如くである。大学当局は県警に一度返したキーをもう一度返してもらい保管していた。そのことは、県警は教官の「良識」を信用して、キーと車の保管と返却を教官に委譲したのである。だからこそ教官は「紛争」の収拾に狂奔したのであり、教官は県警へ「待ってくれ、もう少しで学生を説得できる」という連絡を常にとってきたのである。明らかなことは教授会は学生と県警の「仲介者」としての役割を果すべく、現行管理機構は要請しているのである。つまり、教授会は、一方的・独裁的権限を持ち、無権利状態の学生を管理するという機能を果す限りにおいてわれわれ学生と教授会とは機能的に非和解的な対立関係にあるということである。

そして、2月24日、26日の団交の一方的拒否は、次のことを明らかにしている。

①当日になってからの、大衆団交の一方的破棄を一片の紙切れによって行うこと。これは、大学当局は学生に対しては一切の責任を負う必要のない、独善的管理機構の所有者たる教授会の実態を明らかにした。

②団交拒否の一切の論理的正当性が失なわれ、学生の論理的優位性が存在しているにもかかわらず、「話し合い」は合意に達せず（話し合いが合意に達するのは、普通一方の説得力が他をうわまわるときである）、結果として2月26日大衆団交は再び一方的拒否―つまり当局の意志はまたもや先行したのである。

そのことは、次のことを明らかにしている。つまり、国大協自主規制路線の本質である―「お話し合い」路線は、常に学生と当局の本質的対立状況にあり、論理的には、学生が圧倒的優位に立ちつつも、常に当局の意志が先行し、学生は事実上の無権利状況におかれるということを闘いの中で告発したのであった。これは、当局が独裁的権限の所有者であり、物質力をもっているからである。

島大闘争第二期

2・26バリケード封鎖

2・24―26における大学当局の団交一方的拒否が何を意味するのかは前に述べたとおりである。すなわち、2・24鑑識車侵入に対して抗議にいった時点より、ここに至って闘いの質は、ブルジョア大学の構成原理・体系―その支配機構の全貌を告発したのだ。それは国大協自主規制路線に総括されており、教授会を頂点とした、上意下達の支配機構、そこに存在する「教授会の自治」―「大学の自治」の幻想性、それを支える「学問の自由」の幻想そのものに迫っていった。

このような闘いの思想を物質化したバリケード封鎖は、従って教授会の独占的権限の実質的な拒否↓機能マヒ↓解体に直なるものである。

今日のバリケード封鎖闘争という戦術は、まさに、学生拒否権の実力発動なのである。つまり、教授会の管理者としての組織性（独善的決定権）の実体的解体へと到るものなのだ！

それでは、バリケード封鎖闘争の本質的意義は一体何であろうか。通常のストライキとはどう違うのか。およそ次の三点にまとめられる。

①外なる権力（国家権力）と内なる権力（当局および反革命日共＝民青）に対し、闘いの砦として拠点確保し防衛、つまり、われわれの思想の物質化としての政治的・軍事的意味においてである。

②本質的意味において、建物の占拠・管理＝バリケード封鎖は、現行大学管理機構、つまり教授会権力の執行領域を、実力で彼らから奪いとること、つまり具体的拒否権の発動なのである。それは、拒否権の具体的発動―現行大学の管理機構を実体的にマヒさせるものであるがゆえに、教授会の管理者としての組織性を内から解体せしめるものなのである。バリケード封鎖闘争を、かかる現行大学管理機構の実体的解体の過程的戦術としてとらえなければならない。

さらにバリケード封鎖＝学生自主管理は、かかる解体過程と同時に一方的にではあれ、新たな管理秩序体系の意識的形成の一契機として、その母体形成たりうるといわなければならない。かかる意義をもったものである。それ故に、現行大学管理体制の執行領域をつぎつぎと奪いとっていく連続的、攻撃的ものである。

春休み期におけるバリケード封鎖闘争

自主講座の意義

バリケード封鎖が具体的に拒否権の発動として現行大学の機能マヒ↓解体の意義を一つに持っているとするなら、それと同時に、新たな管理秩序体系形成の母体と、そこにおける主体形成をも意味するものでなければならない。それは、とりもなおさず学生が統治されるという受身から、自らが統治する主体として鍛えあげる重要な側面である。とくにバリケード内で企画された〝自主講座〟は、さまざまな系統、規制され、不十分ではあったが、現行大学への根本的な、全面的な批判を含むわれわれの闘いの思想を支えるものとして、次のように位置づけられている。

それは、第一に学問の本来の機能として鋭い批判性を有していなければならない。その批判性を保障するため学問研究の自己管理―学生の主体性の回復という意義である。これは現行大学における、「学問の自由」なるものが、大学の「政治的中立」の名のもとに、イデオロギーと科学、理論と実践とを分離し、大学の学問研究が果す機能を政治的に疎外し、観念化していくことへの批判的実践―それが〝自主講座〟において顕著的にではあれ、追求されたのである。

第二に自立的な研究者集団としての教官―学生の統一戦線戦術として、その中から生み出されようとする真の批判性・創造性、主体性の回復と形成を目指すものである。「学問の自由」が教授の内面的自由としてしか現在捉えられていないこと、そこから生み出されてくるのは、学生は単なる教育対象＝被教育者としての受身的存在でしかないわけである。これは、大学行政面において、管理運営権を教授会が独占することによって学生を一方的無権利状態に陥し入れていること、すなわち管理対象としてしか存在していないこと、この事実と等く相互関連し、補完し合うものである。

われわれの批判は、単なる口先だけのものではなく、自主講座という実践を裏づけることによって創造的な主体形成が意図された意義は今後も追求しなければならない課題であろう。

入試阻止闘争に関して

3月に入り、最大の闘争のピークとして全国的に入試をめぐっての攻防戦が展開された。全般的には、「中教審答申」の背後にある教育の帝国主義的再編（大学の目的別・格差化、教育の複線化）として、それはまた70年に向けての事前弾圧の意図と構想を持つものであったが、局面においては、入試阻止闘争を圧殺しようと意図していた。入試阻止という問題は、その影響が学内にとどまるだけでなく、受験生、父兄等を含む、きわめて社会的公共性に対峙しなければならない闘争の性格を有していた。従って、この闘争が有効に宣伝車が五台、六台とやってきた。「みなさん、百円札はカシワの葉のようになりました。千円札にホオの木の葉のようになりました。すべての札は木の葉同然となりました。証紙をはらなければ使えません。ただしニセ証紙にご注意を願います。あの窓口で売っているのは、ニセ証紙でございます。わが党発行の証紙でなければ、みなさんの百円札は木の葉同然なのであります」。どのスピーカーからも、こんな文句がとびだした。

「わが党の窓口は、あのもうすこし左、そうです左の方の店のところにあります」。口ぐちにこんな文句もとびだした。なるほど、そういう窓口があり、そこに顔写真入りのポスターがいっぱいはってある。しかし子どもたちの行列は崩れない。しんぼう強い顔つきで、同じ窓口の方へにじりよって行くその行列のなかにやし泣きの顔がある。不平がましい顔がある。そして子どもらしくない声で、あたりに聞えよがしにつぶやくものがいる。「いまさらニセ証紙とはなんだ！」「この札をなぜ木の葉同然にしたんだ！」。するとひとつのスピーカーから、

こんな文句がとびだした。

「主権立のおとなにならないとダメなのです。将来は自衛隊を返してもらわないと主権立のおとなにならないとダメなのです。わが党の証紙をつかいします」。と、こんどは、支配の手段としての「証紙」をつくってはならない。「証紙」をつくるわれわれの力量が問われているのだ。

まさに類をみない弾圧形態であり何よりも島大学園闘争の歴史的な高揚に畏怖した権力の露骨な、それだけに醜悪な姿であった。

入試とは、一口で言えば〝大学の特権性と格差化、複線化の物的保障であり、近代公教育体系を支える帝国主義者の学生層分断支配制度として、また「能力」という欺瞞的平等選別基準による人間序列の制度として機能していることは今や明白であろう。

われわれは、近代公教育体系に対する資本の側からの再編成が大胆に開始されている可動期の中で入試制度そのものを解体していく全人民的教育変革の闘いとして今後も課題にのぼせていかなければならない。

島大闘争第二期の新展開

本部封鎖と現局面

4月に入り、新学期も近くなると、大学当局は全闘委とは一切接点を作らないまま、活発な収拾策動を開始し始めた。その環は「改革案」である。

われわれが2・26文理本館バリケード封鎖に入って以来、当局が一貫してとってきた方針は何であったか。

第一に、卒業式のとり止め、学外入試、入学式のとり止め、その他会議を学外でやるなど、新入生の自宅待機も含めて徹底した回避作戦。第二に、再三にわたる退去勧告、声明、自己批判書要求にみる自らの自己批判的総括を抜きにした一方的・外的かかわり方。第三に、全闘委と何ら接点を作らないままの一方的・欺瞞的改革案の作成。これら当局の態度は、われわれが2・4以降一貫して指摘してきた大学の管理機構の一方的意志先行形態を示すものであると同時に、全闘委と学生大衆を引き離しまさに類をみない弾圧形態であり何よりも島大学園闘争の歴史的な高揚に畏怖した権力の露骨な、それだけに醜悪な姿であった。

入試とは、一口で言えば〝大学の特権性と格差化、複線化の物的保障であり、近代公教育体系を支える帝国主義者の学生層分断支配制度として、また「能力」という欺瞞的平等選別基準による人間序列の制度として機能していることは今や明白であろう。

われわれは、近代公教育体系に対する資本の側からの再編成が大胆に開始されている可動期の中で入試制度そのものを解体していく全人民的教育変革の闘いとして今後も課題にのぼせていかなければならない。

島大闘争第二期の新展開

本部封鎖と現局面

4月に入り、新学期も近くなると、大学当局は全闘委とは一切接点を作らないまま、活発な収拾策動を開始し始めた。その環は「改革案」である。

われわれが2・26文理本館バリケード封鎖に入って以来、当局が一貫してとってきた方針は何であったか。

第一に、卒業式のとり止め、学外入試、入学式のとり止め、その他会議を学外でやるなど、新入生の自宅待機も含めて徹底した回避作戦。第二に、再三にわたる退去勧告、声明、自己批判的総括を抜きにした一方的・外的かかわり方。第三に、全闘委と何ら接点を作らないままの一方的・欺瞞的改革案の作成。これら当局の態度は、われわれが2・4以降一貫して指摘してきた大学の管理機構の一方的意志先行形態を示すものであると同時に、全闘委と学生大衆を引き離し

木曜手帖

(30)

変な夢

みんながタテじまの着物を着ているから、昔のことであるらしい。だが、それぞれ手にしている札は百円札だから、今のようでもある。おおぜいの子どもたちが駅前のある店の窓口に向って長い行列をつくっている。どこの駅なんていうことはわからない。聞けば、すこしはなれたところにある市へ、なにかの見物をしに行くのだそうだ。なにの見物なのかもはっきりしない。「うんとカッコウのよいもの」というだけである。手に手に百円札を一枚ずつ持った。

変な夢を見た。

宣伝車がとおり、六台とやってきた。「みなさん、百円札はカシワの葉のようになりました。千円札にホオの木の葉のようになりました。すべての札は木の葉同然となりました。証紙をはらなければ使えません。ただしニセ証紙にご注意を願います。あの窓口で売っているのは、ニセ証紙でございます。わが党発行の証紙でなければ、みなさんの百円札は木の葉同然なのであります」。どのスピーカーからも、こんな文句がとびだした。

「わが党の窓口は、あのもうすこし左、そうです左の方の店のところにあります」。口ぐちにこんな文句もとびだした。なるほど、そういう窓口があり、そこに顔写真入りのポスターがいっぱいはってある。しかし子どもたちの行列は崩れない。しんぼう強い顔つきで、同じ窓口の方へにじりよって行くその行列のなかにやし泣きの顔がある。不平がましい顔がある。そして子どもらしくない声で、あたりに聞えよがしにつぶやくものがいる。「いまさらニセ証紙とはなんだ！」「この札をなぜ木の葉同然にしたんだ！」。するとひとつのスピーカーから、

こんな文句がとびだした。

「主権立のおとなにならないとダメなのです。将来は自衛隊を返してもらわないと主権立のおとなにならないとダメなのです。わが党の証紙をつかいします」。と、こんどは、支配の手段としての「証紙」をつくってはならない。「証紙」をつくるわれわれの力量が問われているのだ。

――夢だった。おかしな夢を見たものだ。その日十四日とうたりなくて、三十日ぶっ通しで、還暦ボスターばっかり貼ってある道、ホシワの葉も見える道を、ボロを歩いたせいかもしれない。

（PEN）